

# 研究開発の成果と課題

## 1 調査結果・考察

### 1 1 学年 SGH 意識調査の総括

#### 1-1 1 年次終了時での成長実感 (2016 年度～2019 年度)

2016 年度より、各学年の終了時に「7つの資質・能力」(後述)について、入学時と現段階の違いを生徒に回答させているが、同時に端的な「成長実感」についても回答させている。表 1 に示すのが 1 年次終了時「成長実感」の 4 年間の推移と自由記述 (2019 年度のみ) である。今年度は 2020 年 1 月 29 日 (水) に実施した。(n=312)

表 1 [調査結果] SGH 課題研究を通して、「自分は成長したと思う」「自分は成長したと思えない」(2016 年度～2019 年度)

	A 成長したと思う	B 成長したと思えない
2016 年度	59%	39%
2017 年度	69%	28%
2018 年度	81%	17%
2019 年度	86%	14%
平均	74%	25%

[自由記述]なぜ上記のような感想をもったのか、理由を教えてください。(2019 年度)

<p>A 自分は成長したと思う</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日常的に“なぜ? どうして?”を考えるようになった。(疑問の大切さ)</li> <li>・ニュース番組などの内容を深く理解できるようになったし、わからない問題について「少し調べてみようかな」という気持ちになることが増えたから。(興味・関心の深まり)</li> <li>・「自分の考え」をもつことができたと思う。「考える」(たくさんの立場から)ができたと思うから。調べていく中でたくさんの情報を得、知識にすることができたと思うから。(多角的な視点)</li> <li>・自分たちが調べたいことを調べて発表するということの難しさと楽しさを感じられた。また、その方法がわかった。他グループの発表を聞き学べた。(探究活動への理解)</li> <li>・飢餓という問題について、他国の問題だとちゃんと考えたことがなかったけれど、日本の食料廃棄の多さなども影響していることを知って、食との向き合い方を自分なりに考えることができたから。(視野の広がり)</li> </ul>
<p>B 自分は成長したと思えない</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が発言したいことがうまくまとめられない。(要約力)</li> <li>・あまり率先して行動することはなく、出された指示の通り動いただけで終わってしまった活動だから。(積極性)</li> <li>・もっと話し合いで、研究をしていると言えるくらいの濃い内容を話したかった。(討論の深まり)</li> <li>・納得のいく発表ができなかった。(達成感)</li> </ul>

・知識は増えたが、そもそも興味がなかった。(興味・関心)

「成長したと思える」と回答した生徒の割合が、年度を経るにしたがって上昇している。この4年間、「課題研究」の教材開発が生徒の実体に合わせて確実に進化していることを示している。表2は、「成長実感」と「7つの資質・能力」との関係を整理したものである。

表2【調査結果】「成長実感」と「7つの資質・能力の成長」との関係(2019年度)

A 自分は成長したと思える [4 そう思う 3 ややそう思う 2 あまりそう思わない 1 そう思わない]で回答(以下同じ)

7つの資質・能力(現段階)	4	3	2	1	平均	肯定的	否定的
課題発見能力	27%	66%	6%	1%	3.2	93%	7%
問題解決能力	31%	56%	10%	0%	3.2	88%	10%
論理的思考力	26%	61%	9%	1%	3.1	88%	10%
コラボレーション能力	44%	46%	8%	1%	3.3	89%	9%
コミュニケーション能力	27%	59%	11%	1%	3.1	86%	12%
企画力	21%	55%	18%	3%	2.9	77%	21%
異文化受容性	32%	50%	15%	1%	3.1	82%	16%
日本文化発信	19%	57%	21%	3%	2.9	75%	23%
平均	36%	72%	44%	46%	3.1	85%	14%

B 自分は成長したと思えない

7つの資質・能力(現段階)	4	3	2	1	平均	肯定的	否定的
課題発見能力	5%	60%	26%	9%	2.6	65%	35%
問題解決能力	7%	58%	26%	9%	2.6	65%	35%
論理的思考力	14%	47%	28%	9%	2.6	60%	37%
コラボレーション能力	21%	35%	35%	9%	2.7	56%	44%
コミュニケーション能力	14%	49%	30%	7%	2.7	63%	37%
企画力	5%	26%	49%	21%	2.1	30%	70%
異文化受容性	14%	40%	30%	14%	2.5	53%	44%
日本文化発信	14%	37%	35%	12%	2.5	51%	47%
平均	12%	44%	32%	11%	2.5	56%	44%

以上のように、A「成長実感の高い者」の回答では、課題発見能力、コラボレーション能力、問題解決能力、論理的思考力が高い数値を示している。B「成長実感の低い者」の回答では、否定的に捉えているものとして、企画力、日本文化発信、コラボレーション能力、異文化受容性の項目が挙げられる。2016年度の分析では、B「成長実感の低い者」の特徴として、ア 課題設定の問題(テーマが大きすぎたなど、課題設定がうまくいかなかった)、イ グループの問題(相談・協力がうまくできなかった)、ウ 個人の

取組意識の問題（消極的で，他人に頼っていることが多かった）にまとめたが，今回の結果でも同様の傾向がうかがえるだろう。コラボレーション能力は A 群・B 群ともに数値的な関連があり，取組の消極性は自由記述の内容から読み取れる。

## 1-2 「7つの資質・能力」について（2016年度～2019年度）

7つの資質・能力（実際には8項目）について，入学時と現段階での違いを生徒に4段階で回答させている。入学時および現時点の4段階の割合・平均差を以下の表3に示した。

表3[調査結果] 7つの資質・能力の成長（「課題発見・問題解決」は と とに分割：2016年度～2019年度の平均値）

【課題発見能力】みずから問題意識をもって研究課題を設定することができる。

課題発見能力	(A) 入学時					(B) 現段階					(C)
	4	3	2	1	平均	4	3	2	1	平均	B-A
平均	5%	31%	53%	10%	2.3	18%	65%	14%	2%	3.0	0.7

【問題解決能力】上記のみずから設定した研究課題について，その解決に向けて取り組むことができる。

問題解決能力	(A) 入学時					(B) 現段階					(C)
	4	3	2	1	平均	4	3	2	1	平均	B-A
平均	6%	38%	46%	9%	2.4	20%	62%	14%	2%	3.0	0.6

【論理的思考力】設定した研究課題を多面的に考察し，収集した資料・データを論理的に分析・統合することができる。

論理的思考力	(A) 入学時					(B) 現段階					(C)
	4	3	2	1	平均	4	3	2	1	平均	B-A
平均	4%	32%	50%	13%	2.3	17%	59%	20%	2%	2.9	0.6

【コラボレーション能力】さまざまな人々と協働しながら，研究活動を発展させ，推進することができる。

コラボレーション能力	(A) 入学時					(B) 現段階					(C)
	4	3	2	1	平均	4	3	2	1	平均	B-A
平均	8%	42%	41%	8%	2.5	29%	52%	15%	2%	3.1	0.6

【コミュニケーション能力】研究の成果を適切な方法でまとめ，それを効果的に相手に伝えることができる。

コミュニケーション能力	(A) 入学時					(B) 現段階					(C)
	4	3	2	1	平均	4	3	2	1	平均	B-A
平均	4%	35%	50%	9%	2.4	17%	60%	19%	2%	2.9	0.6

【具体的な解決を図る企画力】研究成果について，自分たちで実行可能な具体的な解決策を示し，行動を起こすことができる。

企画力	(A) 入学時					(B) 現段階					(C)
	4	3	2	1	平均	4	3	2	1	平均	B-A
平均	3%	24%	55%	16%	2.1	14%	53%	27%	4%	2.8	0.6

【異文化に対する受容性】民族・宗教・言語・性差・階層等の多様性を考慮しながら，平和で公正な社会の実現を追求できる。

異文化受容性	(A) 入学時					(B) 現段階					(C)
	4	3	2	1	平均	4	3	2	1	平均	B-A
平均	8%	38%	42%	10%	2.4	22%	53%	19%	4%	3.0	0.5

【日本文化理解と発進力】日本の伝統・文化を深く理解し、多様な日本文化の特徴を伝えることができる。

日本文化発信	(A) 入学時					(B) 現段階					(C)
	4	3	2	1	平均	4	3	2	1	平均	B-A
平均	6%	38%	42%	7%	2.5	17%	55%	23%	3%	2.9	0.4

現段階(1年次終了時)において平均した数値の高いものは、コラボレーション能力(3.1)、課題発見能力(3.0)、問題解決能力(同)、異文化受容性(同)であり、入学時と現段階で数値の伸びの高いものは、課題発見能力(+0.7)、問題解決能力(+0.6)、論理的思考力(同)、コラボレーション能力(同)、コミュニケーション能力(同)、企画力(同)である、という結果になった。反対に数値の伸びの鈍いものは、日本文化発信(+0.4)、異文化受容性(+0.5)であった。

### 1-3 グローバリゼーション理解・国際理解・進路等について(2016年度~2019年度)

以下の表4に示すのが、2016年度より1学年を対象に毎年2月に実施しているアンケートの質問項目および2016年度~2019年度の調査結果の平均値である。1~5「グローバリゼーション理解・価値判断・アジア観念の理解について」、6~11「国際理解について」、12~14「進路・国際情勢への興味について」、以上すべての項目において、実施年度間の明確な差異は見られなかった。

表4[調査結果]グローバリゼーション理解・価値判断・アジア観念の理解について

Q1 SGH(課題研究)を通して、グローバル化について意識するようになった。

2016~2019年度	そう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
平均	26%	57%	13%	3%

Q2 「グローバル化」について、あなたの考えに近い選択肢を選んでください。

2016~2019年度	グローバル化は人々の生活を豊かにする	グローバル化は人々の生活に新たな問題を生む
平均	59%	40%

Q3 あなたは貧困や環境問題などのアジア地域が抱える諸問題についてどう思いますか？

2016~2019年度	それらは問題を抱えている地域・国で解決すべきことだ	それらの問題に対して自分たちが責任を負っているわけではないが、助け合っていないと困る	それらの問題に対して自分たちは責任の一端を負っている
平均	5%	60%	34%

Q4 あなたは自分が行動することによって、少しでも人々を幸せにしたり、社会をよくしたりできると信じていますか？

2016~2019年度	つよく信じている	できればそうありがたい	あまりそうは思えない、自信がない

平均	17%	75%	7%
----	-----	-----	----

Q5 アジア地域を欧米などの他の地域と比べて関心は？

2016～2019年度	アジアの方に関心がある	他の地域の方に関心がある	どの地域にも関心がない
平均	31%	59%	9%

Q1～Q5の結果から，SGH（課題研究）を通して，約70%の生徒がグローバル化を意識するようになったこと，グローバル化に肯定的な意見を持つ生徒が多いこと，大多数の生徒が，自分の行動によって社会や未来が変えられるという希望をもっていること，30%の生徒はアジアに興味を持っているが，多くの生徒は他の地域の方に興味があること，以上4点の傾向があることがわかった。

表5【調査結果】国際理解について

Q6 コミュニケーション能力（語学力）を向上させ，積極的に外国人とコミュニケーションをはかることを，どう考えていますか？

2016～2019年度	重要だと思うので，意識して実践している	重要だと思うが，あまり実践していない	あまり重要ではない	関心がない
平均	29%	67%	1%	1%

Q7 国際社会で起きている問題（政治・経済・社会・環境など）に関心をもち，理解することを，どう考えていますか？

2016～2019年度	重要だと思うので，意識して実践している	重要だと思うが，あまり実践していない	あまり重要ではない	関心がない
平均	21%	74%	2%	2%

Q8 文化の違いを理解し，文化的多様性を尊重すること，どう考えますか？

2016～2019年度	重要だと思うので，意識して実践している	重要だと思うが，あまり実践していない	あまり重要ではない	関心がない
平均	38%	58%	1%	2%

Q9 文化の違いを越えて，人類普遍の共通項を見出すことについて，どう考えますか？

2016～2019年度	重要だと思うので，意識して実践している	重要だと思うが，あまり実践していない	あまり重要ではない	関心がない
平均	16%	68%	9%	6%

Q10 自分自身，あるいは自分が属している文化・社会への理解を深めることについて，どうかんがえますか？

2016～2019年度	重要だと思うので，意識して実践している	重要だと思うが，あまり実践していない	あまり重要ではない	関心がない
平均	29%	65%	2%	3%

Q11 世界の国々のあいだに生じている格差について，あなたはどのように考えますか？

2016～2019年度	格差は，どちらかといえば先進国の方に問題がある	格差はどちらかといえば途上国の方に問題がある	格差は，先進国と途上国，どちらにも同じくらい問題がある	格差があるのは仕方ない
平均	18%	10%	55%	16%

Q6～Q10の結果から、コミュニケーション能力、国際社会の理解、文化の多様性を重要視する生徒が多数存在していることが伺える。SGHプログラムの影響はもちろんであるが、SGH指定以前から「国際理解療育」「異文化交流」等国際高校として独自の教育活動を展開している本校の環境が、1年生にこのような結果をもたらしている可能性が考えられる。

Q11の「格差」対するに捉え方は、「先進国に問題あり」が「途上国に問題あり」の約2倍となっているが、半数が「先進校・途上国どちらも問題あり」に回答している。この傾向は4年間変わらない。グローバル化がもたらす構造的な不平等や歴史的背景への理解が深まっていないと言わざるを得ない。現代社会および歴史的背景の理解においては、課題研究における自発的な学習のみでは不十分であり、地歴・公民科目での学習指導が必要である。(本校のカリキュラムでは、「地理」「政治経済」等の履修は3年次。)

表6【調査結果】進路・国際情勢への興味について

Q12 SGH(課題研究)を通して、進路意識が高まった。

2016～2019年度	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
平均	13%	42%	35%	10%

Q13 国際化に重点を置く大学に進学したいと考えていますか？(千葉大学、筑波大学、慶応大学、早稲田大学、上智大学、東洋大学、法政大学、明治大学等のスーパーグローバル大学)

2016～2019年度	すでに志望校を決めている	具体的に検討している	検討しているが、具体的な段階ではない	興味がない
平均	10%	16%	49%	25%

Q14 国際情勢への興味・関心を持ち、新聞やニュースなどを見る機会が増えた。

2016～2019年度	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
平均	14%	41%	34%	10%

Q12・Q13の結果から、約半数の生徒は進路意識の高まりを感じていることがわかる。大半とは言えないまでも、1年次終了時点で半数の生徒が進路を意識していることは、課題研究の影響だと言える。Q14 国際情勢への興味・関心については、「そう思う」「ややそう思う」合わせてやっと半数越える程度の反応であった。

#### 1-4 国内フィールドワークについて

1年次9月～10月に実施する国内フィールドワークに関して、以下の質問項目でアンケートを実施している。2016年度～2019年度の平均値を表7に示す。

表7【調査結果】国内フィールドワーク(2016年度～2019年度の平均値)

質問項目	4	3	2	1	平均	肯定的	否定的
「共生」「観光」「教育」「環境」について考えることができた	41%	40%	13%	5%	3.1	81%	18%
主体的な調査や体験ができた	28%	45%	21%	5%	2.9	73%	26%

調査や質的研究の方法を身につけることができた	16%	55%	24%	4%	2.8	71%	28%
研究を進めていく手掛かりが得られた	20%	48%	24%	6%	2.8	69%	30%
事前調査・学習が十分にできた	15%	51%	28%	5%	2.7	66%	32%
事後分析・まとめが十分にできた	22%	55%	18%	4%	2.9	77%	21%

すべての項目で、66%～81%の生徒が肯定的な回答をしているが、特に「テーマとの関連」、「主体的な調査」、「事後分析」の項目が高い数値を示している。初年度における訪問地の策定、次年度以降の改善点（訪問地の新規開拓、グループ研究との接続強化など）が、調査結果に反映されたものと考えられる。

## 2 2・3 学年 SGH 意識調査の総括

### 2-1 2 年次終了時の成長実感（2016 年度～2018 年度）

2016 年度～2018 年度の 3 年間、2 学年の終了時に「課題研究は学ぶことは多かった」という質問項目で生徒の学習達成感を回答させた。表 8 に 3 年間の数値の推移を示した。1-1 「1 年次終了時の成長実感」のような明確な数値の伸びは見られない。また、年度ごとの数値のばらつきも見られる。

表 8【調査結果】課題研究は学ぶことが多かった（2016 年度～2018 年度）

	4 そう思う	3 ややそう思う	2 あまり思わない	1 思わない	平均	肯定的	否定的
2016 年度	39%	49%	8%	3%	3.3	88%	10%
2017 年度	23%	49%	21%	5%	2.9	72%	26%
2018 年度	30%	51%	14%	4%	3.1	81%	19%
平均	31%	50%	14%	4%	3.1	81%	18%

### 2-2 ルーブリック自己評価（2016 年度～2018 年度）

「課題研究発展」の最終授業で、毎年 2 年生を対象に、本校作成の「自己評価ルーブリック」（「研究報告書第 3 年次」を参照）による自己評価を実施している。表 9 は 2016 年度～2018 年度の調査結果の平均値を示したものである。

表 9【調査結果】ルーブリック自己評価（2016 年度～2018 年度の平均値）

9 つの観点	4	3	2	1	平均	肯定的	否定的
深い問題意識	16%	54%	26%	4%	2.8	70%	30%
明確な課題設定	18%	48%	30%	4%	2.8	66%	34%
十分な調査	10%	45%	41%	4%	2.6	54%	45%
多角的な分析・統合	10%	54%	32%	4%	2.7	64%	35%

互いを高め合う協働	24%	43%	23%	9%	2.8	67%	32%
伝わりやすい発表	18%	56%	21%	4%	2.9	74%	25%
議論を深める質疑応答	9%	41%	43%	7%	2.5	49%	50%
有効な提案	14%	49%	30%	6%	2.7	62%	37%
共生への視点	15%	57%	19%	7%	2.8	72%	26%

以上 3 年間の平均値の中で、「互いを高め合う協働」、「深い問題意識」、「伝わりやすい発表」、「共生への視点」の 4 項目が肯定的な捉え方の高いものである。反対に、否定的な捉え方の高いものが、「十分な調査」、「議論を深める質疑応答」、「有効な提案」の 3 項目である。

肯定的な項目は、1 年次の「7 つの資質・能力」(本章 1-2 参照)の「コラボレーション」「課題発見」「コミュニケーション」「異文化受容」に対応した結果である。しかし、否定的な項目は、ルーブリックといった指標を設定してはじめて見えてきたものである。

また、表 10 のように毎年各項目間の相関係数を求めてきたが、「相関係数で比較の数値の高い項目」で 3 カ年共通するものが、「適切な調査と分析」1 項目のみであるため、「自己評価ルーブリック」の結果から相関関係を検証することには限界があると考えられる。

表 10 相関係数で比較の数値が高い項目(年度ごとの比較)

2018 年度		2017 年度		2016 年度	
分析と協働	0.557	問題意識と提案	0.554	発表と質疑応答	0.559
適切な調査と分析	0.550	問題意識と課題設定	0.546	適切な調査と分析	0.538
問題意識と課題設定	0.547	適切な調査と分析	0.501	問題意識と共生	0.510
発表と質疑応答	0.515	—	—	課題設定と質疑応答	0.504
課題設定と分析	0.515	—	—	—	—
課題設定と協働	0.514	—	—	—	—
課題設定と適切な調査	0.508	—	—	—	—
課題設定と提案	0.503	—	—	—	—

## 2-2 「コンピテンシー」「グローバルマインドセット」「問題解決能力」の変化(2018 年度)

「7 つの資質・能力」や「自己評価ルーブリック」のほかに、SGH プログラムによる生徒の成長・変容を見極める指標として以下の質問項目(全 38 項目)について、(A)入学時と(B)現段階での違いを生徒に 6 段階(「全くそうは思わない」～「大変そう思う」)で回答させた。表 11～表 13 は、「コンピテンシー」「グローバルマインドセット」「問題解決能力」に関する生徒の回答を、(B)現時点における平均値の大きさの順番に並び替えたものである。



## 2-2-1 コンピテンシー（行動特性）の変化（表 11）

表 11【調査結果】文化の違いから生じる困難な事象に対するコンピテンシー(行動特性)の変化:13項目

コンピテンシー		(A)入学時		(B)現時点		(C)平均差
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	(B)-(A)
c3	自分と異なる立場の人の価値観を尊重する。	4.5	0.96	5.0	0.87	0.5
c7	相手との協力関係を築くように心がける。	4.4	1.00	5.0	0.87	0.5
c8	反対意見にも耳を傾ける。	4.4	0.94	4.9	0.79	0.5
c2	必要ならば、最初に決めたことを変える。	4.3	1.07	4.8	0.92	0.5
c1	相手の置かれた立場や気持ちを察する。	4.3	0.98	4.8	0.89	0.5
c5	複数の選択肢を考える。	4.0	1.03	4.7	0.93	0.7
c4	複数の視点から問題の原因を考える。	3.9	1.07	4.7	0.92	0.8
c9	自分の得意な能力を活かす行動をとる。	4.2	1.07	4.7	0.98	0.5
c6	相手が意見を述べやすいように心がける。	4.0	0.97	4.6	0.93	0.6
c12	今回の出来事から、学んだことを振り返る。	3.9	1.02	4.5	1.02	0.6
c10	自分の意見を効果的に述べて相手に説明する。	3.8	1.05	4.5	0.93	0.7
c13	解決に向けて強い熱意を維持続ける。	3.8	1.10	4.5	1.03	0.7
c11	解決が進んでいるか、途中で確認する。	3.9	1.00	4.5	0.99	0.6
平均		4.1	—	4.7	—	0.6

c3「他者の立場の尊重」、c7「反対意見の尊重」、c8「他者との協力関係」の多様性受容に関わるコンピテンシーである3項目が現段階での高い数値を示している。数値の伸びでは、c4「複数の視点」、c5「複数の選択肢」、c10「効果的な説明」、c13「解決への熱意」の値が高かった。また、「コンピテンシー」「グローバルマインドセット」「問題解決能力」の中で、「コンピテンシー」の平均値が最も高かった。

## 2-2-2 グローバルマインドセット（心的態度）の変化（表 12）

表 12【調査結果】国際的に将来活躍できるためのグローバルマインドセット(心的態度)の変化:11項目

グローバルマインドセット		(A)入学時		(B)現時点		(C)平均差
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	(B)-(A)
m1	様々な外国に行ってみたい。	4.4	1.51	5.1	1.20	0.7
m2	外国の様々な異文化に触れることは楽しい。	4.4	1.30	5.0	1.11	0.6
m8	自分のやりたいことを見つけ、情熱を傾けたい。	4.4	1.19	4.9	1.16	0.5
m7	議論する際、自分だけが意見を述べることなく、参加者それぞれの意見を聞くことができる。	4.0	1.07	4.6	1.06	0.5
m10	海外ボランティアなどの国際的な活動に積極的に参	3.4	1.58	4.0	1.61	0.6

	加したい。					
m11	将来、外国で働くことも視野に入れて、職業を選択したい。	3.4	1.69	3.9	1.74	0.4
m5	自分は人の役立つことができる人間だと思う。	3.3	1.14	3.7	1.22	0.4
m4	自分の短所よりも長所に目を向けている。	3.3	1.18	3.7	1.26	0.4
m9	将来は、外国の大学や大学院への留学(6ヶ月以上)も視野に入れて勉強したい。	3.3	1.68	3.7	1.79	0.3
m6	集団での問題解決場面において、率先してリーダー的な役割を担うことができる。	3.0	1.30	3.4	1.33	0.4
m3	自分に自信がある。	2.8	1.24	3.3	1.43	0.4
	平均	3.6	—	4.1	—	0.5

m1「様々な外国へ行きたい」が現段階の数値が最も高く、数値の伸びも高かった。以下、m2「異文化に触れる」、m8「情熱を傾ける」、m7「参加者の意見を聴く」と、価値観の多様性と自発性を重視するマインドを示す項目が続く。

一方、m3「自信がある」、m6「リーダー的な役割」、m9「外国への留学」、m4「長所の重視」、m5「役に立つ人間」の5項目が現段階の数値および数値の伸びが鈍い。m9以外は、自己肯定感に関わる項目である。

### 2-2-3 問題解決能力の変化(表13)

表13【調査結果】問題解決能力(社会で生じるさまざまな問題に対する探求行動)の変化:14項目

問題解決能力		(A)入学時		(B)現時点		(C)平均差
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	(B)-(A)
p10	作成した図表について、必要に合わせた使い方ができる。	3.8	1.01	4.5	0.96	0.7
p12	提案を適切にプレゼンテーションできる。	3.60	1.20	4.5	1.06	0.9
p8	問題解決に合ったデータや情報を選択できる。	3.7	1.01	4.5	0.92	0.7
p5	問題に影響を与える原因の候補をチームメンバーと一緒に検討して列挙し、まとめることができる。	3.7	1.08	4.4	1.03	0.8
p11	分析した結果から、重要な結論を導き出すことができる。	3.7	1.01	4.4	0.97	0.7
p9	集めたデータや情報の正確さがわかる。	3.7	1.04	4.4	1.00	0.7
p6	問題の原因を挙げ、重要度をまとめることができる。	3.6	1.01	4.3	1.01	0.7
p1	基礎学力としての知識を持つ。	3.8	1.01	4.2	0.98	0.5
p2	関心ある事柄について、その問題の本質を発見した	3.5	0.97	4.2	0.94	0.6

	り,原因を説明したりすることができる。					
p3	問題の重要度の根拠を見つけることができる。	3.5	0.99	4.2	0.94	0.7
p7	問題解決に向けて仮説を立てることができる。	3.5	1.04	4.2	1.02	0.7
p4	生じている問題について,知識や経験を通して説明できる。	3.4	1.00	4.1	0.97	0.7
p14	自分の発表に対する質問に適切に回答できる。	3.4	1.12	4.1	1.06	0.7
p13	提案した内容がどこまで有効かについて説明することができる。	3.4	1.05	4.00	1.03	0.6
	平均	3.6	—	4.3	—	0.7

14項目の中で、p10「図表の使い方」、p12「プレゼンテーション」、p8「データや情報の選択」、p5「チームメンバーとの協働」が、現段階の数値および数値の伸びがともに高かった。その反面、p13「提案」、p14「質問への回答」p4「知識や経験を通じた説明」の値が低かった。これらは2-2「ループリック自己評価」を裏付けた結果となっている。

数値の伸びが最も低かったのが、p1「基礎学力としての知識」であった。本校のカリキュラム上の問題（地理・政治経済の履修学年）と基礎知識の重要性に対する認識の浅さが背景として挙げられる。

#### 2-4 3年次における進路意識（2017年度～2019年度）

3年生（2017年度～2019年度）に対して、以下の進路意識に関する調査を行った。

表 14【調査結果】進路選択について（2017年度～2019年度）

Q1	SGH(課題研究)の経験が進路選択に影響を与えた。		
	かなり影響を与えた	少し影響を与えた	全く影響を与えなかった
Q2	Q1の質問で、 を回答したのみ。SGHが与えた影響とはどのようなものか？（複数回答可）		
	国際化に重点を置く学校への進学	専攻分野を選択する際の影響	
	入試・採用試験の際での活用	その他	

##### Q1 進路選択への影響

2016年度～2019年度年平均	かなり影響した	少し影響した	全く影響しなかった
3年生全体	3.8%	32.7%	62.8%
課題研究選択者	6.8%	54.6%	37.8%

##### Q2 進路選択への影響の内訳

2016年度～2019年度年平均	国際化に重点に置く学校	専攻分野の選択	入試・採用試験	その他
3年生全体（影響あり）	19.2%（49.3%）	11.7%（28.9%）	10.7%（24.0%）	5.4%（14.7%）
課題研究選択者（影響あり）	36.8%（60.8%）	21.6%（35.9%）	15.7%（25.3%）	9.4%（14.6%）

影響あり全体	47.1%	28.4%	23.9%	13.8%
--------	-------	-------	-------	-------

以上の結果から、3年生全体で35%以上、課題研究活用選択者で60%以上の生徒に課題研究の経験が進路選択に影響を与えたことがわかる。その中でも「専攻分野への影響」に注目したい。課題研究の学習が、国際的な課題や国内の社会問題に対する理解だけでなく、3年生全体で11.7%、課題研究活用選択者では21.6%の生徒の進路選択に直結していたことが確認できた。

### 3 職員 SGH 意識調査の総括

#### 3-1 「コンピテンシー」「グローバルマインドセット」「問題解決能力」の重要度・効果

2018年度は、職員に対して2-3で2年生に行った質問項目について(A)重要度と(B)SGHプログラムによる効果を尋ねてみた。表15は、「コンピテンシー」「グローバルマインドセット」「問題解決能力」に関する職員の回答を、(B)SGHによる効果の数値の高いものを3項目ずつ抜き出したものである。

表15[調査結果]重要度とSGHによる効果(職員:2018年度)

コンピテンシー・グローバルマインドセット・問題解決能力		(A)重要度		(B)SGHによる効果	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差
c7	相手との協力関係を築くように心がける。	5.1	0.65	4.0	1.02
c3	自分と異なる立場の人の価値観を尊重する。	5.3	0.79	3.9	0.97
c8	反対意見にも耳を傾ける。	5.2	0.63	3.9	1.02
m2	外国の様々な異文化に触れることは楽しいと思う。	5.0	0.85	4.0	1.05
m1	様々な外国に行ってみたい。	4.7	1.02	3.9	1.00
m7	議論する際、自分だけが意見を述べることなく、参加者それぞれの意見を聞くことができる。	5.0	0.88	3.8	1.01
p8	問題解決に合ったデータや情報を選択できる。	4.8	0.77	3.5	0.95
p5	問題に影響を与える原因の候補をチームメンバーと一緒に検討して列挙し、まとめることができる。	4.8	0.86	3.8	1.02
p2	関心ある事柄について、その問題の本質を発見したり、原因を説明したりすることができる。	5.2	0.77	3.6	1.08

図1は、すべての項目の(A)重要度の平均値を横軸に、(B)SGHによる効果の平均値を縦軸にとった散布図である。(A)重要度の平均値と(B)成果の平均値の相関係数は0.504となり、また、近似的関係から導き出される回帰直線を散布図に重ね書きしてある。

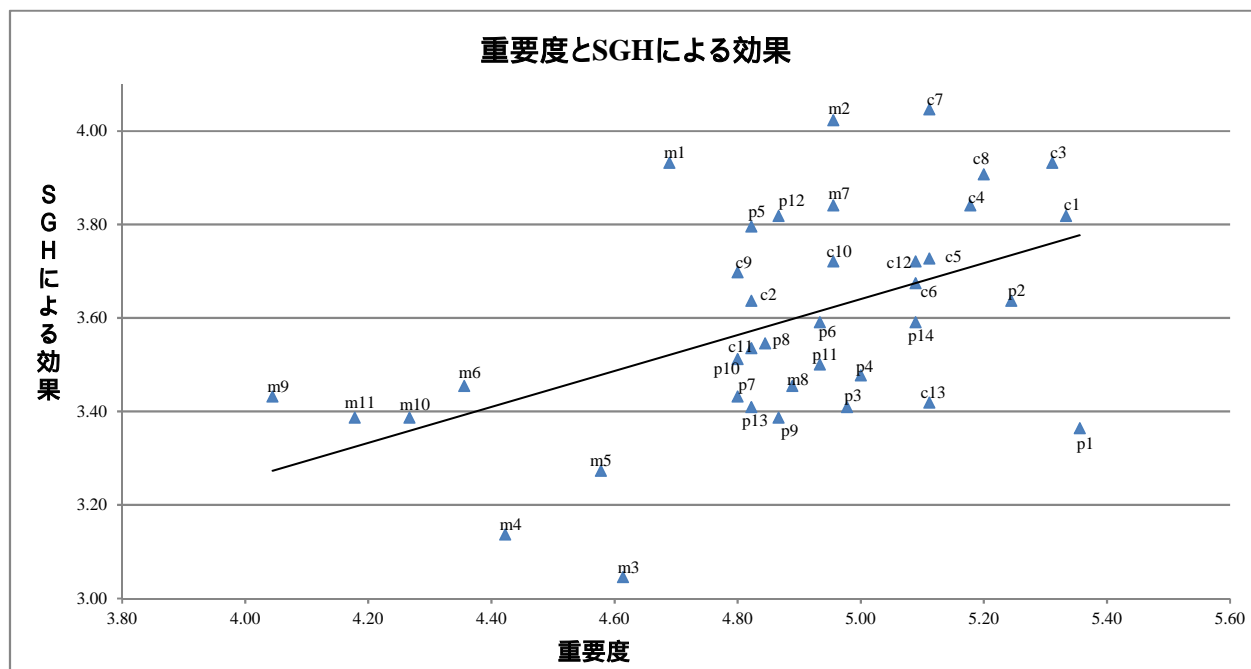


図1 重要度の平均値とSGHによる効果の平均値との関係(職員:2018年度)

この回帰直線より上にある項目は、SGHプログラムによる効果が認められる項目、下にある項目は効果が本校職員の期待する水準に達していない項目だと考えられる。

表16 効果が期待されている水準より大きい項目・小さい項目(職員:2018年度)

効果が期待されている水準より大きい項目	
コンピテンシー	c3・他者の立場の尊重    c4・複数の視点から原因究明    c7・他者との協力関係 c8・反対意見の尊重
グローバルマインドセット	m1・様々な外国に行きたい    m2・異文化に触れる    m7・参加者の意見を聴く
問題解決能力	p5・チームメンバーとの協働    p12・プレゼンテーション
効果が期待されている水準より小さい項目	
コンピテンシー	c13・解決に向けた熱意
グローバルマインドセット	m3・自信がある    m4・長所の重視    m5・役に立つ人間
問題解決能力	p1・基礎学力としての知識    p2・問題の本質・原因    p3・重要度の根拠 p9・データや情報の正確さ    p14・質問への回答

職員と生徒とでは、評価が異なる項目がある。「コンピテンシー」では、c13「解決に向けた熱意」が生徒の評価では数値の伸びの高いものに含まれている。「グローバルマインドセット」の項目では、ほぼ生徒の自己評価と重なるが、「問題解決能力」では、の2項目であり、これらの項目も生徒の評価と重なっているが、生徒の自己評価と重なるのは、p1「基礎学力としての知識」、p14「質問への回答」のみである。

このように、職員と生徒との間には評価のばらつきが見られるが、両者の評価が一致する項目は、生徒の変容を客観的に示す指標とみなすことができる。

表 17 生徒と教員の評価が一致する項目(2018 年度)

プラス評価	c3・他者の立場の尊重 m1・様々な外国に行きたい p5・チームメンバーとの協働	c7・他者との協力関係 m2・異文化に触れる p12・プレゼンテーション	c8・複数の視点からの原因究明 m7・参加者の意見を聴く
マイナス評価	m3・自信がある p1・基礎学力としての知識	m4・長所の重視 p14・質問への回答	m5・役に立つ人間

### 3-2 生徒の変容に関する認識の違い(2016 年度～2018 年度)

表 18 は SGH プログラムを通じて生徒にどのような能力が身についたかを、2 年生・教員それぞれに質問した結果をまとめたものである。

生徒の評価が高く教員の評価が低いものとして、「問題意識」「情報収集力」「多角的な考察」「企画・計画力」「要約力」「論文の書き方」「積極性」7 項目が示された。

教員の評価が高く生徒の評価が低いものとして、「プレゼンテーション力」「コミュニケーション力」2 項目が示された。

表 18 [調査結果]生徒にどのような能力が身についたか？[複数回答可](職員・2 年生:2016 年度～2018 年度の平均値)

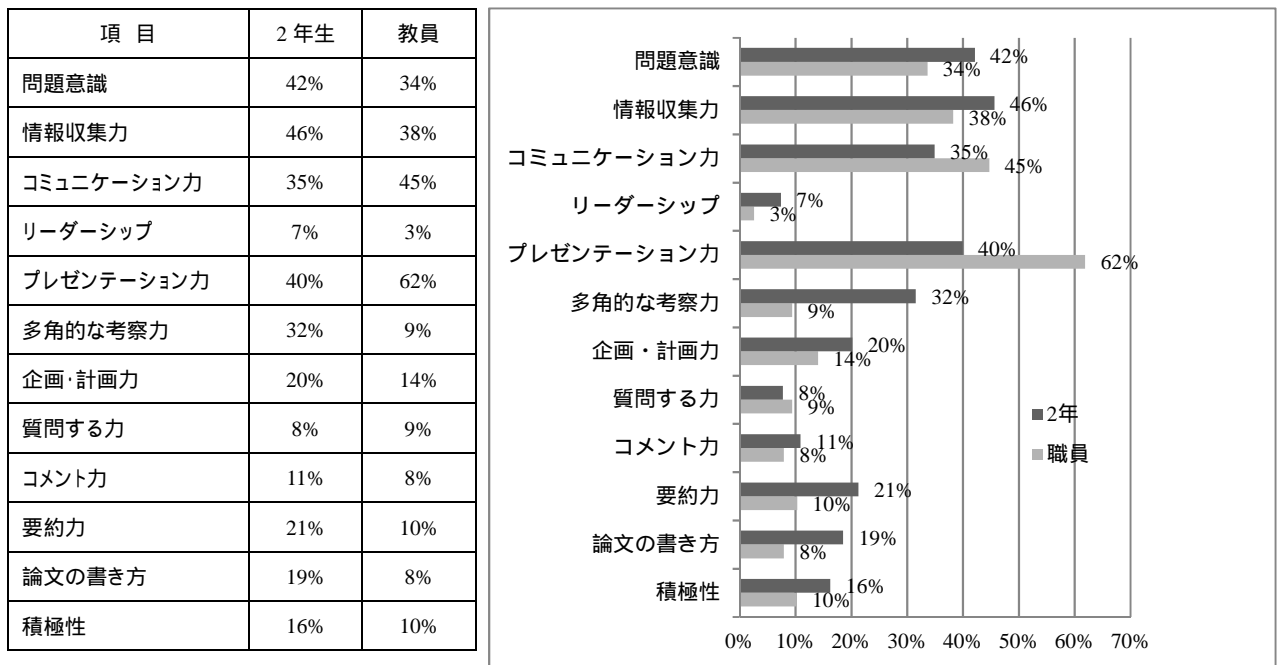


表 19 は SGH プログラムを通じて生徒の日常的な変容をどう捉えているかを質問したものである。職員が生徒の変容を肯定的に捉えているのが、「グローバルな社会問題への興味」「身近な問題への興味」の 2 項目のみであった。生徒の意識調査 Q14「国際情勢への

興味・関心を持ち、新聞やニュースなどを見る機会が増えた」に対する肯定的な回答の55%とほぼ同様の結果であった。

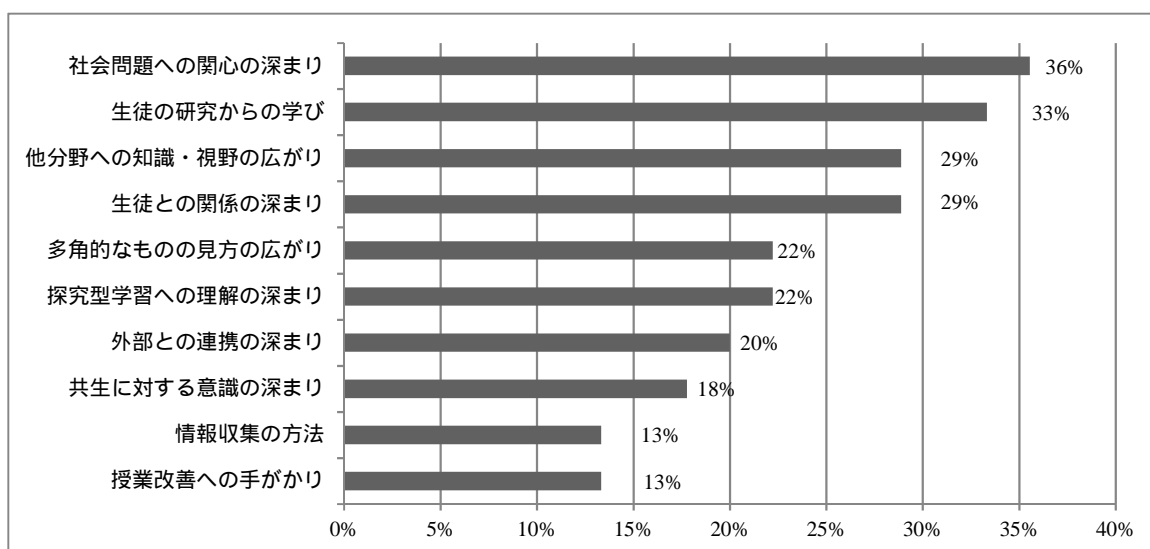
表 19 【調査結果】生徒の日常的な変容をどう捉えているか？（職員：2016 年度～2018 年度の平均値）

質問項目	4	3	2	1	平均	肯定的	否定的
授業に対して積極的に取り組むようになった	6%	36%	49%	9%	2.4	41%	58%
課外活動に対して積極的に取り組むようになった	5%	43%	42%	9%	2.4	47%	51%
ニュースなど興味を持って見るようになった	11%	35%	46%	7%	2.6	46%	53%
身近な問題に興味を持つようになった	10%	44%	41%	4%	2.7	54%	45%
グローバルな社会問題に興味を持つようになった	17%	41%	35%	5%	2.8	57%	40%
進路（キャリア形成）に対する意識が変わった	5%	28%	60%	5%	2.3	34%	65%

### 3-3 職員自身の変容について（2016 年度・2018 年度）

2016 年度の意識調査 [自由記述] の結果に基づき、2018 年度の調査では職員自身の変容について選択肢を設け回答させた。表 20 は職員自身が感じた SGH による自己の変容を示したものである。「社会問題への関心」「生徒の研究からの学び」「他分野への視野の広がり」など、職員の認識面での変容が促されるとともに、生徒との関係が深まるなどの効果も一定の割合で確認された。

表 20 【調査結果】職員自身の問題として、本校の SGH は自身にどのような変容があったか？（職員：2018 年度）



#### その他(自由記述)

- ・今まで関わりのなかった分野の問題へ興味を持った。
- ・社会問題への取り組みを身近に感じた。
- ・自分のボランティア等の経験を生かせることができた。
- ・今まであまり意識していなかった事柄についても意識するようになった。
- ・周囲の教員と協力し合って毎時の活動案を立てたり、より効果的な活動を進めたりする能力が否応なく身に付いた。

#### 4 保護者アンケート（2016年度～2019年度）

保護者による学校評価アンケートの結果は表 21 の通りである。

「1 本校は、国際高校としての特色を發揮した教育活動を展開している」「2 SGH の取組がグローバル人材の育成につながっている」の 2 項目の肯定的評価が 97%・85%と高い数値を示した。

また、「3 国際情勢へ興味・関心を持ち、ニュースなどを見る機会が増えた」の項目については、保護者による肯定的な評価が 62%、生徒自身による肯定的な評価が 55%と、両者の間には認識の差が若干認められる。

さらに、PTA の国際教育委員会では、異文化体験研修を企画・実施することが毎年の恒例となり、2月のマラソン大会時の PTA・後援会による豚汁提供では、宗教上の理由で豚肉を食することのできない生徒のためにハラール認定を受けた食材で料理を提供するなど、生徒の学習活動とともに、保護者にも異文化に対する理解が浸透しつつある。

表 21 【調査結果】学校評価アンケート(1・2年保護者:2016年度～2019年度の平均値)

	質問項目	そう思う	ややそう思う	あまり思わない	思わない	肯定的	否定的
1	本校は、国際高校としての特色を發揮した教育活動を展開している	59%	38%	2%	1%	97%	3%
2	SGH の取組が、グローバル人材の育成につながっている	33%	51%	13%	3%	85%	16%
3	お子さんが、国際情勢へ興味・関心を持ち、ニュースなどを見る機会が増えた	20%	42%	31%	7%	62%	39%
4	海外の出来事について話す機会が増えた	20%	37%	34%	9%	57%	43%
5	SGH の取組により、お子さんが将来のことを考えるきっかけになっている	20%	41%	31%	8%	60%	40%
6	グローバル人材を育てる意識が高い大学への進学を望む	27%	48%	18%	7%	76%	24%



## 2 研究開発の成果

### 1 今年度（2019年度）における目標の進捗状況，成果

#### 1-1 学習プログラムの進化

1年意識調査において、「課題研究を通して自分は成長したと思える」と回答した生徒の割合が今年度はさらに向上している（2016年度：59%，2017年度：69%，2018年度：81%，2019年度：86%）。また，校内発表会の達成度・満足度も肯定的評価が81%と高い数値を示している。1年「課題研究基礎」の学習プログラムが有効に機能し，かつ改善が確実に進んでいることが確認された。

#### 1-2 外部連携

##### (1) 課題研究における大学等との連携

千葉大学・麗澤大学・国際医療福祉大学・東洋大学・明海大学等の連携が軌道に乗り，課題研究に関して，今年度の大学教員・学生等の外部人材が参画した者のべ人数は，23名であった。

##### (2) 企業・国際機関等との連携

国内フィールドワークとインターンシップの事業を中心に，国内外の企業・国際機関等との定常的な連携が続いている。海外フィールドワークでは，NPO法人パルシクの協力を得て，私立・公立学校への訪問，クアラグラ鳥獣保護区・マングローブ炭工場 MMT・ペナン沿岸漁民福利協会 PIFWA・ペナンヘリテージトラスト PHT 等への調査を行っている。

##### (3) 研究発表大会への生徒参加

高校生の体験発表会（聖徳大学：11月2日実施） 参加生徒4名（1グループ）

\*副学長賞・受賞

第4回関東甲信越静地区高校生探究学習発表会（立教大学：12月15日実施）

参加生徒15名（3グループ） \*優秀賞（日本語ポスター）・受賞

全国高校生フォーラムポスターセッション（筑波大学：12月23日実施）

参加生徒1名

地理オリンピック（筑波大学） 参加生徒1名 \*銀賞・受賞

高校生ポスターセッション」（日本地理学会：3月28日実施予定）

参加生徒2名（1グループ）

#### 1-3 その他

##### (1) 英語力の向上

平成 28 年度より英語検定を 1・2 年生全員受験とした結果、2 級以上に合格した者の数は、平成 27 年度 113 名、28 年度 171 名、29 年度 176 名、30 年度 274 名、令和元年度は 194 名、増加傾向が続いている。

(2) 入学生への波及効果

本校への入学志願者倍率は前年度比で若干低くなったものの高倍率が続いている。

(普通科：前期 2.19 倍・後期 1.99 倍、国際科：2.04 倍)

(3) SGH 第 3 期生の進路意識

SGH 第 3 期生の調査結果は、3 年生全体で 38.5% (昨年度 34.5%)、課題研究活用選択者で 76.4% (昨年度 46.3%) の生徒が課題研究が進路選択に影響を与えたと回答している。特に「専攻分野への影響」では、全体 11.1% (昨年度 9.9%)、選択者 18.4% (昨年度 16.7%) という結果であった。

(4) 前年度からの改善点

1 年「課題研究基礎」：グループ編成・テーマ設定時期

最終年度にあたる今年度はグループ編成をクラス内で行い、昨年度までのクラス・学科の枠を超えた編成方法と比較した。

新たな人的交流の機会には犠牲になったが、グループ活動が活性化し、発表内容・満足度・達成感で例年以上の成果を挙げた。また、研究テーマの設定時期を 7 月に変更することで、国内フィールドワークに対する目的意識を明確化した。

2 年「課題研究発展」：台湾修学旅行に即した学習プログラム

修学旅行に焦点化した学習プログラムを策定し、導入学習(グループ学習・講演会等)・現地調査(街頭調査・姉妹校生徒とのディスカッション等)・事後学習(発表会)を実施した。

SGH 指定終了後の方向性：

- ・「GS 課題研究(選択 2 単位)」を継続(既決事項)
- ・「国内フィールドワーク」「海外フィールドワーク」継続を前提に民間の資金活用を検討
- ・「探究型学習プログラム(入学から卒業までの 3 年間を見据えた)」を総合的な探究の時間企画委員会が来年度に策定
- ・「GS プログラム」(日本文化発信、ボランティア・インターンシップ等)SGH 指定以前からの本校の実践活動なので、今後も継続

## 2 教育課程の研究開発状況

### 2-1 必修科目：GS 課題研究(基礎・発展)

課題研究に全生徒が取り組む時間を確保するために、1・2 学年の全生徒(8 クラス)を対象とする「GS 課題研究基礎」(1 学年・1 単位)、「GS 課題研究発展」(2 学年・1 単位)を設定した。

#### (1) グループ編成

クラス・学科の枠を超えたグループ編成を行い、各グループが設定したテーマ（観光・教育・環境・共生の4分野）に基づいて2年間グループ研究を行った。

(2) テーマ設定

当初グローバルな社会問題に拘泥して大きなテーマを設定し研究が行き止まるグループも多数存在したが、生徒自身が興味・関心を抱く身近な話題からテーマ設定できる運用に改めた。その結果、生徒の現代社会の問題に対する認識を深めることができた。

(3) 5回の校内発表会、レポート提出

1年次：国内フィールドワーク報告（10月）、中間発表会（2月）

2年次：ミニポスター発表会〔研究相談〕、校内発表会（11月）、代表発表〔SGH研究発表大会〕（1月）、最終レポート提出（2月）

(4) 発表形式

当初は「パワーポイント」による発表形式であったが、2018年度より1・2年生とも「ポスターセッション」へ変更した。理由は、発表内容の焦点化を促すため（明確な課題設定）と発表者と聞き手の距離を縮めるため（議論を深める質疑応答）である。結果的に懸案であったIT機器集中の問題も解消することができた。

(5) 弾力的な運用

課題研究（基礎・発展）は1単位科目であるが、国内フィールドワーク・講演会・校内発表会等の必要に応じて「総合的な学習の時間」の一部を使って柔軟に運用した。

(6) 課題：必ずしも「深い学び」が実現しているわけではない

A 問題点の深化が不十分（現代社会の問題に関する関心・知識が十分に深まっていない。）

B 研究手法が身につかない（先行研究に基づき研究手法にのっとりた研究になっていない。）

C カリキュラム上の問題（課題研究〔1・2年〕と教科指導〔地歴・公民科目〕が有機的に連動していない。）

(7) 課題：グループの編成方法

今年度はグループ編成をクラス内で行い、従来の編成方法と比較した結果、グループ活動が活性化し、発表内容・達成感が向上した。従来の編成には「新たな人的関係の構築」、クラス内編成には「グループの活性化」という利点があることが明確になった。

2-2 選択科目：GS 課題研究（活用）

3学年では、1・2学年の研究内容をさらに深めるために、選択科目として「GS 課題研究活用」（1学年・2単位）を設定した。

研究形態はグループおよび個人研究とし、発表の場を校外（各種発表会、連携大学・行政機関）に広げるとともに、英語によるコミュニケーション能力のさらなる向上を図った。

2-3 学校設定科目（選択2単位）

これまで国際科（3クラス）生徒のみ選択可能であった科目を、普通科（5クラス）生徒にも選択できるように、「GS 速読」「GS 時事英語」「GS 日本文化」「中国語（ ）」「韓国語（ ）」「フランス語（ ）」の9科目を学校設定科目として設定した。さらに広くに、

生徒たちの興味・関心に応えることができるようになった。

## 2-4 特色ある教材開発

課題研究を効果的に進めるために、「GS 課題研究（基礎・発展）」において、以下のような教材開発を行っている。

### (1) 1年次・導入学習

- A 身近な生活場面に潜む社会問題に気付く
- B グローバルな社会課題と自己との関わりを理解する
- C グローバルな社会課題の光と影の側面を理解する

### (2) ロールプレイ教材：「ペナン島とグローバルゼーション」

マレーシア・ペナン島の観光開発を題材に、様々な立場の多角的な視点から問題を捉え討論するミニディベート形式の教材

### (3) 国内フィールドワーク：1学年全員参加（全8コース）

4分野（観光・教育・環境・共生）のテーマに基づくコースを設定し、課題研究の基礎を学べるように、予備調査・情報収集（質的研究手法）・事後発表など、本校独自のプログラムを開発した。

### (4) 海外フィールドワーク：マレーシア（クアラルンプールおよびペナン島）

NPO 法人パルシックの協力のもと、主体的な調査が実践できるように、予備調査・調査計画立案・現地での調査・情報収集（質的研究手法）・事後発表など、本校独自のプログラムを開発した。

### (5) 学習指導案・マニュアル・PPDAC サイクル表

1・2年課題研究の年間計画に基づき、毎時間「課題研究指導案」「ワークシート」等を作成した。研究成果や指導方法の継承のために、2016年度の終わりに「課題研究の手引き」を作成した。

### (6) ループリック評価票（発表会用・2年学習終了時の自己評価用）

9項目4段階のループリックを作成し、発表会の審査および生徒自身による学習評価において利用した。

## 3 生徒の変化について

### 3-1 1年次における「7つの資質・能力」の変容

7つの資質・能力の成長（「課題発見・問題解決」は と とに分割：2016年度～2019年度の平均値）

7つの資質・能力	(A) 入学時					(B) 現段階					(C)
	4	3	2	1	平均	4	3	2	1	平均	B-A
課題発見能力	5%	31%	53%	10%	2.3	18%	65%	14%	2%	3.0	0.7
問題解決能力	6%	38%	46%	9%	2.4	20%	62%	14%	2%	3.0	0.6

論理的思考力	4%	32%	50%	13%	2.3	17%	59%	20%	2%	2.9	0.6
コラボレーション能力	8%	42%	41%	8%	2.5	29%	52%	15%	2%	3.1	0.6
コミュニケーション能力	4%	35%	50%	9%	2.4	17%	60%	19%	2%	2.9	0.6
企画力	3%	24%	55%	16%	2.1	14%	53%	27%	4%	2.8	0.6
異文化受容性	8%	38%	42%	10%	2.4	22%	53%	19%	4%	3.0	0.5
日本文化発信	6%	38%	42%	7%	2.5	17%	55%	23%	3%	2.9	0.4

4年間の調査結果から、「7つの資質・能力」のどの項目においても数値の伸びが示された。特に「コラボレーション能力」(3.1)「課題発見能力」(3.0)「問題解決能力」(同)「異文化受容性」(同)が高い数値であり、入学時との比較では「課題発見能力」(+0.7)「問題解決能力」(+0.6)「論理的思考力」(同)「コラボレーション能力」(同)「コミュニケーション能力」(同)「企画力」(同)が高い伸びを示している。

反対に数値の伸びの鈍いものは、「日本文化発信」(+0.4)「異文化受容性」(+0.5)であった。

また、成長を実感できない生徒の主な要因は、「課題設定がうまくいかない」「グループ内の協力がうまくいかない」「積極的になれない」の3点であることが確認できた。

### 3-2 2年次における「ルーブリック自己評価」の数値

ルーブリック自己評価(2016年度～2018年度の平均値)

9つの観点	4	3	2	1	平均	肯定的	否定的
深い問題意識	16%	54%	26%	4%	2.8	70%	30%
明確な課題設定	18%	48%	30%	4%	2.8	66%	34%
十分な調査	10%	45%	41%	4%	2.6	54%	45%
多角的な分析・統合	10%	54%	32%	4%	2.7	64%	35%
互いを高め合う協働	24%	43%	23%	9%	2.8	67%	32%
伝わりやすい発表	18%	56%	21%	4%	2.9	74%	25%
議論を深める質疑応答	9%	41%	43%	7%	2.5	49%	50%
有効な提案	14%	49%	30%	6%	2.7	62%	37%
共生への視点	15%	57%	19%	7%	2.8	72%	26%

3年間の調査結果から、「深い問題意識」「互いを高め合う協働」「伝わりやすい発表」「共生への視点」4項目で肯定的な捉え方が高く、反対に「十分な調査」「議論を深める質疑応答」「有効な提案」の3項目で否定的な捉え方をしていることがわかった。

また、以下の4点が確認された。

- A 全体として「7つの資質・能力」の調査に比較して数値が低くなる傾向がある
- B 「7つの資質・能力」とは、「コラボレーション」「課題発見」「コミュニケーション」「異文化受容性」4項目との関連が見られる
- C ルーブリックという指標を通してはじめて否定的な要素が見えてくる
- D ルーブリックの各項目間の明確な相関関係は明らかにできなかった

### 3-3 2年次におけるコンピテンシー・グローバルマインドセット・問題解決の変容

昨年度の調査では、新たに「コンピテンシー」「マインドセット」「問題解決」の3領域38質問項目の調査を追加した。

コンピテンシー・グローバルマインドセット・問題解決の変容(生徒による自己評価)

生徒による自己評価	プラス評価	マイナス評価
コンピテンシー [全13項目]	c3・他者の立場の尊重 c7・反対意見の尊重 c8・他者との協力関係 c4・複数の視点 c5・複数の選択肢 c10・効果的な説明 c13・解決への熱意	(なし)
グローバルマインドセット [全11項目]	m1・様々な外国へ行きたい m2・異文化に触れる m7・参加者の意見を聴く m8・情熱を傾ける	m3・自信がある m4・長所の重視 m5・役に立つ人間 m6・リーダー的な役割 m9・外国への留学
問題解決 [全14項目]	p5・チームメンバーとの協働 p8・データや情報の選択 p10・図表の使い方 p12・プレゼンテーション	p1・基礎学力としての知識 p4・知識や経験を通じた説明 p13・提案 p14・質問への回答

2年次における平均値は、「コンピテンシー」(4.7)「グローバルマインドセット」(4.1)「問題解決能力」(4.3)であり、「コンピテンシー」が最も高い評価となった。数値の高い項目では、「7つの資質・能力」や「自己評価ルーブリック」の項目との関連が見られ、数値の低い項目では、「マインドセット」の自己肯定感に関わるものが目立った。

職員に対しても同じ項目で、重要度とSGHによる効果を尋ねてみた。職員と生徒との間には評価のばらつきが見られるが、両者の評価が一致する項目は、生徒の変容を客観的に示す指標とみなすことができる。

コンピテンシー・グローバルマインドセット・問題解決の変容(生徒と職員の評価が一致する項目)

プラス評価 (8項目)	c3・他者の立場の尊重 m1・様々な外国に行きたい p5・チームメンバーとの協働	c7・他者との協力関係 m2・異文化に触れる p12・プレゼンテーション	c8・複数の視点からの原因究明 m7・参加者の意見を聴く
マイナス評価 (5項目)	m3・自信がある p1・基礎学力としての知識	m4・長所の重視 p14・質問への回答	m5・役に立つ人間

### 3-4 英語力の向上

平成28年度(2016年度)から、第3回英語検定を1・2年生全受験とした。その結果、取得者が大幅に増加した。

英検年度別取得状況(2020年3月12日現在)

	1級	準1級	2級	準2級
2014年度	0	6	84	72

2015年度	0	7	106	98
2016年度	3	8	160	233
2017年度	1	11	176	157
2018年度	0	18	256	132
2019年度	0	15	179	158

## 4 教師の変化について

### 4-1 教科指導との相乗効果

学校評価アンケート（職員）によれば，本校職員の81%が積極的にアクティブラーニングを実践している。

[職員]学校評価アンケート:アクティブラーニング型授業を取り入れ，授業改善を行っている(2016年度～2019年度平均値)

2016～2019年度 平均値	そう思う	ややそう思う	あまり思わない	思わない	肯定的	否定的
	21%	59%	19%	1%	81%	20%

全校を挙げて課題研究を実施することにより，アクティブラーニングの必要性和有効性が教員間に浸透し，大多数の教員が生徒の主体的・協働的な学びにつながる授業改善を行うという相乗効果がもたらされた。

### 4-2 職員の意識変容

課題研究を通して，グループ研究や発表の手法を学ぶとともに，「社会問題への関心」「生徒の研究からの学び」「他分野への視野の広がり」など，職員の認識面での変容が促されるとともに，生徒との関係が深まるなどの効果も一定の割合で確認された。

## 5 学校における他の要素の変化（授業，保護者等）について

### 5-1 授業評価について

学校評価アンケート（生徒）によれば，70%～80%の生徒が本校の授業について肯定的な評価を行っている。

[生徒]学校評価アンケート:学習指導(2016年度～2019年度平均値)

	そう思う	ややそう思う	あまり思わない	思わない	肯定的	否定的
丁寧で分かりやすい授業	23%	61%	14%	2%	83%	17%
教え方や教材の工夫	24%	55%	19%	2%	79%	21%
学力向上につながる授業	17%	55%	25%	12%	72%	29%

全体的に評価の数値が全体的には高いものの，職員アンケートに比べるとやや数値が低

くなる傾向にある。

## 5-2 本校への入学志願者の増加

SGH 指定後 4 年間、本校への入学志願者が増加し高倍率が続いている。

	普通科(200名)		国際科(120名)
	前期(60%)	後期(40%)	前期(100%)
平成 28 年度入試	2.41	1.90	1.51
平成 29 年度入試	2.29	1.89	2.10
平成 30 年度入試	2.83	2.59	2.08
平成 31 年度入試	3.03	2.51	2.06
令和 2 年度入試	2.19	1.99	2.04

## 5-3 PTA 活動への波及

本校の SGH 指定後、PTA 国際教育委員会では、異文化体験研修を企画・実施することが毎年の恒例となった。また、2 月のマラソン大会時の PTA・後援会による豚汁提供では、宗教上の理由で豚肉を食することのできない生徒のためにハラール認定を受けた食材で料理を提供するなど、生徒の学習活動とともに、保護者にも異文化に対する理解が浸透しつつある。

## 6 評価・検証に関わる問題点

### 6-1 7 つの資質・能力

生徒の自己評価において、成長を実感していることを示す調査結果が出た一方で、成長要因や不成長要因、他項目との関連が明確になっていない。

### 6-2 「共生」概念の限界

「多文化共生」問題の背景には政治的・経済的要因が根強く絡んでおり、問題解決を著しく困難にしている。

### 6-3 「意欲の差」の検証

1 年次には課題研究に意欲的な生徒が大半を占めていたが、2 年次には課題研究に意欲を持続できない生徒の割合が増加したが、その要因と傾向を明確にすることができなかった。



### 3 課題

#### 1 「総合的な探究の時間」のプログラム

SGH 指定終了にともない、1・2 学年全生徒必修の「課題研究基礎・発展」は廃止される。しかし今後も、これまでに蓄積してきた探究型学習の実践経験を、「総合的な探究の時間」に生かしていくべきである。

総合の時間には SGH 以前から本校独自で取り組んできたものもあるので、「課題研究基礎・発展」のプログラムをそのまま実施していくことはできない。しかし、社会の変化や生徒の実態をふまえて教育の理念を再検討し、その基礎のうえに総合・LHR などを再編成・再構築していく作業が不可欠である。検討には時間を要するが、次年度に議論を重ねてプログラムを構築していきたい。

#### 2 選択科目「課題研究」の継続・発展

一方で選択科目としての「課題研究」は今後も存続させていくつもりである。これまでの実践をふまえて、今後も継続・発展させていきたい。

#### 3 学校のなかのグローバル：海外にルーツをもつ子どもたちへの支援

課題研究をとおして生徒たちとともに協働探索するなかで明らかになってきた問題のひとつに、「学校のなかの多文化性」がある。生徒たちが身近な生活場面で「グローバル化」を見つめなおしたときに、学校文化そのものが単一的で閉鎖的・抑圧的であり、海外にルーツをもつ生徒などにとって生活しづらい場になっていたことに気づいたのである。

この 5 年間に生徒たちとともに育んできた課題意識は、指定終了後も学校として向き合っていくべきものと考えられる。さらに、海外にルーツをもつ子どもの数は年々増加しており、個々に応じた教育支援を必要とする生徒も増えてきている。学校を真に「グローバル」で開かれたものにしていくためには、課題研究や外国語教育といった学習指導の枠にとどまらず、学校の構造全体から不断に見直していくことが必要であろう。

具体的方策のひとつとしては、以下のような科目新設を、新教育課程の実施にあわせて検討したい。

- (1) 外国人特別選抜入学の生徒を対象に、母語あるいは母文化を指導する学校設定科目<sup>1</sup>
- (2) 異文化理解・多文化共生について探究する科目

こうした科目新設などをとおして、海外にルーツをもつ生徒が自己否定することなく、健やかに学校生活を送り、自己実現を図ることのできる学習環境を整備していきたい。さらに、学校の文化的多様性を確保することは、外国人生徒のみならず全ての生徒・職員にとっても良い影響をもたらすことにつながるだろう。

しかし母語・母文化については文化的アイデンティティにかかわるナイーブな課題でもある。単一のアイデンティティを押しついたり、文化本質主義に陥ったりすることのないよう、工夫されたプログラムを専門家・関連団体の助言を得ながら開発していく必要がある。次年度以降も研究を継続していきたい。

さいごに改めて考えたい。果たして「グローバルな学校」とは何か。分断と排除がすすみ、グローバリゼーションへの反動が高まるなか、もういちど顧みる必要があるのではないか。おそらくは、英語を使いこなし、グローバル企業で活躍する人材を育成することだけではないだろう。民族や宗教・言語・性差・階級などの多様性を考慮しながら他者の合理性を理解しようと努めること、他者と連帯しつつ公正な社会の実現を追求すること。そうした活動に取り組むこともまた、「グローバルな学校」と呼べるのではないか。

#### 4 学校の構造と体質

しかし一方で、残念ながら 5 年間の研究開発は順風満帆とはいいがたく、教育現場に多くの混乱をもたらす結果にもなってしまった。一因には、総合的なヴィジョンを全校で共有できなかったことが挙げられよう。学習指導のみならず、生徒指導・進路指導・国際教育など学校の教育活動すべてを包括する理念が欠けていたため、SGH が総合的な教育プログラムとならず、「新たな活動が加わり負担が増えるだけ」とみなされてしまう不幸な事態が生じた。課題研究を他教科の学習指導や他の行事・取組と有機的に結びつけることは、たえて叶わなかった。

研究開発にはゆとりが必要である。新たな試みも哲学がなければ形骸化し、理念があったとしても、現実的諸条件とのすりあわせがなければ実現はできない。だが哲学的理念を

---

<sup>1</sup> 母語指導については現下、文部科学省でも議論が進められている。たとえば、中央教育審議会への諮問（2019年4月17日）では「増加する外国人児童生徒等への教育の在り方」にかんして、日本の生活や文化に関する教育、母語の指導、異文化理解や多文化共生の考え方に基づく教育の在り方について諮問がなされた。また、「外国人の受入れ・共生のための教育推進検討チーム報告」（2019年6月）では、重点的に進めるアクションとして、「異文化理解や多文化共生の考え方に基づく教育の充実」、具体的には「母語・母文化を尊重しつつ、日本語・日本文化への理解を促進」することが挙げられている。

鍛えあげるにも，実現に向けて条件を整備するにも，時間的・財政的なゆとりが不可欠だ。  
現状の多忙な日常業務のなかで研究開発をしても，結果的に現場を疲弊させるだけである。

## 1 外国語教育の取り組み

本校は国際高校の役割として、特に外国語教育において先進的な取り組みを行い、その成果を他校に普及することが求められている。そのため特色のあるカリキュラム、アクティブ・ラーニング型の授業、充実した課外活動等を通じて「使える」語学力の育成に力を入れている。ただ学ぶだけではなく、学んだことを実際に使う機会が非常に多いことが、本校の外国語教育の特色である。また、その成果を「授業練磨の授業公開」や「英語教育拠点校としての授業公開」などを通じて学校種を越えて広める努力を続けている。他県や海外からの視察の要請もあり、これらを積極的に受け入れている。

本校における外国語教育、特に英語教育の取り組みは、千葉県初のスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール（SELHi）＜文部科学省・平成 14 年度～16 年度＞、千葉スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール（C-SELHi）＜千葉県教育委員会・平成 17 年度～19 年度＞、「英語力を強化する指導改善の取り組み」＜文部科学省・平成 24 年度＞、「英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を強化する指導改善の取り組み」＜文部科学省・平成 25 年度＞の研究指定事業の成果である。また教職員個人レベルでは、広く高等学校の教科指導の充実と教職員の指導力の向上を目的とした「教科研究員制度」による研究成果の積み重ねや、文部科学省認定「英語教育推進リーダー」の存在も大きく寄与している。

### 1 目標

英語科が授業を行うにあたり拠り所としている本校の「Can-Do リスト」では、卒業時に身につけさせたい英語力として「卒業後に、英語を使って更なる高等専門教育を受けたり、将来的に職場や社会生活の中で英語を使ったりする準備段階として、より社会的・広範囲の話題についての、まとまった量の英語を聞いたり読んだりできる力、自分の意見や考えを、ある程度論理立てて書いたり話したりする力をつける。」としている。この目標を達成するために各学年において、段階的により詳細な「Can-Do リスト」を策定し、生徒の実態に応じて改定を行っている。

### 2 実施内容

本校では、英語科職員 16 名、外国語指導助手（ALT）4 名、第二外国語担当者（フランス語・中国語・韓国語）各 1 名、中国語・韓国語の講師（母語話者）各 1 名の手厚い体制が敷かれている。これにより、1・2 年生のコミュニケーション英語 / 総合英語、3 年生の英語表現 / 異文化理解で週 1 時間のチーム・ティーチング（TT）を、国際科では加えて 1 クラスを 2 分割にした少人数教育、デイリー・イングリッシュ、イングリッシュ・コンポジションでの TT を行っている。選択科目においても、英語会話、GS 時事英語、ディベート、ディスカッション、GS 課題研究活用で TT の時間を確保している。

第二外国語は2・3年生の選択科目として設定されており、国際科のみならず普通科の生徒も選択できることが特徴のひとつである。2単位のいずれもがTTである。

第一学年の国際科が実施する「国際科セミナー」では、8名の班ごとに1名のALTがついてスピーチやディベートなどの活動を行い、2泊3日を英語のみで過ごし、実践的な英語力を磨いている。そのほか、海外修学旅行や姉妹校への短期留学などの行事も、学んだ英語を使う良い機会である。

課外活動では、成田山参道での通訳ボランティア、小学校の外国語活動を支援する「チュードレント・アシスタント」など外国語を必要とする活動に多くの生徒が参加し、学習の成果を発揮している。

### 3 成果と今後の課題

英語の授業では、ペアワーク、グループワークを多用し、生徒が協力して意見を述べ合ったり、問題解決をしたりする場が多く設けられている。特に教科書に載っていない答えを協働で導き出すことに関しては、SGHの課題研究と相互補完の関係が確立されつつある。また国際科で1・2年次に行われるディベートでは、出典を明確にし、根拠をもとに自分の主張を構築することを学ぶ。これは課題研究でも必須で、ここでも相乗効果が現れている。

このような取り組みから、本校生徒は概して外国語への関心が高く、外国語の各種検定にも積極的に挑戦する姿が見られる。なお、平成28年度より第3回英検を1・2年生全員受験としたことから英検取得者が大幅に増加している。

今後の課題としては3年間を通じた目標を英語科の職員が全員で共有し、同じ到達目標のもとで各学年が段階を踏んだ指導を行うこと。生徒が一定の時間を与えられて準備したものを話すだけでなく、即興的に様々な事柄について話すことができる力をつけること。授業を通じて更に生徒の思考力を育成するための設問の仕方を工夫すること。客観性・妥当性・信頼性の高い評価の方法を模索し、実践することなどが挙げられる。いずれの課題に対しても、英語科だけではなく全ての教科で連携し全職員で取り組み、生徒のコミュニケーション能力を育てることに尽力していきたい。

#### 【参考資料】

\* 英検年度別取得状況(2020年3月12日現在)

	1級	準1級	2級	準2級
平成26年度	0	6	84	72
平成27年度	0	7	106	98
平成28年度	3	8	160	233
平成29年度	1	11	176	157
平成30年度	0	18	256	132
令和元年度	0	15	179	158



## 2 各種大会・コンテスト等への参加

### 1 英語関係

千葉県高校生英語ディベート大会 (第11回)	第4位
千葉県高等学校生徒英語研究発表大会 (第71回)	2・3年レシテーション部門：第2位 柳澤 日南(3H)

### 2 フランス語関係

東日本高校生フランス語スケッチ コンクール2019 11月16日(土)アンスティテュ・フランセ東京	2位(アンスティテュ・フランセ東京賞): 菅野 麗(3F)・保坂 茜(3G) 8位(奨励賞): 石井 陽(2A)・野路 実来(2H)
---	---

### 3 中国語関係

武蔵野大学中国語スピーチコンテスト・ 高校生の部 9月28日(土)武蔵野大学有明キャンパス	最優秀賞： 内山 瑠胡花(3H)
全日本中国語スピーチコンテスト 千葉県大会(千葉県日中友好協会主催) 10月20日(日)千葉市民会館	中高生朗読部門：中国語学習連絡会会長賞 丸山 天真(3A) 高校生スピーチ部門：日中友好協会会長賞(全国大会推挙) 内山 瑠胡花(3H)
関東地区高校生中国語発表大会 (高等学校中国語教育研究会関東支部主催) 11月23日(土)東京都立第一商業高等学校	暗誦部門：最優秀賞 坂牧 悠里(2G) 弁論部門：優秀賞 内山 瑠胡花(3H) 朗読部門：審査員奨励賞 五十嵐 帆佳(2G)
明海大学日本語・中国語通訳コンテスト 12月14日(土)明海大学浦安キャンパス	通訳訓練の部第一部：優秀賞 野嶋 さくら(2G) 通訳訓練の部第二部：最優秀賞 小堀 玲奈(2G) 逐次通訳の部：優秀賞 岡 朱里(2A) 同時通訳の部：最優秀賞 内山 瑠胡花(3H)
千葉県高校生中国語発表大会 (千葉県高等学校中国語部会主催) 1月15日(水)柏市立柏高等学校	初級の部：最優秀賞 坂牧 悠里(2G) 入門の部：優秀賞 高橋 美桜(2F) 審査員奨励賞 菊池 百優(1D)
全日本中国語スピーチコンテスト 全国大会(日中友好協会主催) 1月12日(日)日中友好会館	高校生スピーチ部門：第2位(国際文化フォーラム賞) 内山 瑠胡花(3H)

### 4 韓国語関係

「話してみよう韓国語」東京・ 中高生大会2020 2月8日(土)韓国文化院	最優秀賞： 飯田 結子(2A) 佐藤 千尋(2H)
---	------------------------------

### 3 海外交流一覧

今年度は1年おきに相互訪問を行っているアメリカの（アイオワ州）の姉妹校であるジョン・F・ケネディー高校と韓国の姉妹校である果川外国語高校が来校した。ジョン・F・ケネディー高校は7月に約1週間、本校生徒宅のホームステイをしてホストスチューデントの授業に参加するなどして交流を深めた。一時交流が中断していた果川外国語高校は交流再開後3度目の来校となった。1月に来校し、週末本校生徒宅にホームステイをして本校での交流を深めた。

第2学年の生徒、職員が、昨年度本校に来校した台湾の陽明高級中等学校を修学旅行で訪問し旧交を温めるとともに更なる交流を深めた。年度末には米・豪の姉妹校に生徒、職員を派遣する予定であるが、新型コロナウイルスの影響により中止せざるをえなくなるのではないかと懸念されている。この事業は今年度で37回目を迎えるに至る。

海外フィールドワークでは、昨年同様、マレーシアを訪問し、現地大学生やクアラルンプールの私立学校の生徒、さらに地方の公立学校の生徒との交流を行った。

自国第一主義が拡がり、世界が内向きになりつつある今こそ、市民レベルの、特に若者同士の交流を大事にしていきたいと思う。

#### 令和元年度海外交流一覧

NO.	事業名等	期 間	人 数
1	アメリカ ジョン・F・ケネディー高校 (来校・ホームステイ)	7/3～7/11	生徒15名、職員2名
2	韓国 果川外国語高校 (来校・ホームステイ)	1/18～1/20	生徒18名、職員1名
3	SGH 海外フィールドワーク (マレーシア)	7/31～8/9	生徒9名、職員2名
4	台湾修学旅行・桃園市立陽明高級中等學校 (交流)	10/20～10/23	第2学年 生徒320名、職員15名
5	アメリカ 短期海外派遣 (姉妹校訪問・ホームステイ)	3/17～3/30	生徒15名、職員2名
6	オーストラリア 短期海外派遣 (姉妹校訪問・ホームステイ)	3/12～3/28	生徒20名、職員2名

：SGH 予算を利用 網掛け部分：海外派遣

5・6については新型コロナウイルスの影響により急遽中止



#### 4 課題研究・外部連携一覧（2015年度～2019年度）

##### 1 研究発表会・相談会の講師一覧（大学教員等57名）

<p>本田 勝久（千葉大学教授）</p> <p>野村 純（千葉大学教授）</p> <p>岩本 涉（千葉大学エグゼクティブ・マネージャー）</p> <p>田辺 新一（千葉大学特任教授）</p> <p>五十嵐 洋己（千葉大学助教）</p> <p>小林 聡子（千葉大学助教）</p> <p>ガイタニディス ヤニス（千葉大学助教）</p> <p>大嵐 竜午（千葉大学助教）</p> <p>山川 和彦（麗澤大学教授）</p> <p>成瀬 猛（麗澤大学教授）</p> <p>籠 義樹（麗澤大学教授）</p> <p>梅田 徹（麗澤大学教授）</p> <p>江島 顕一（麗澤大学教授）</p> <p>大越 利之（麗澤大学准教授）</p> <p>首藤 聡一郎（麗澤大学准教授）</p> <p>大越 利之（麗澤大学准教授）</p> <p>上村 昌司（麗澤大学准教授）</p> <p>近藤 明人（麗澤大学准教授）</p> <p>大関 浩美（麗澤大学准教授）</p> <p>内尾 太一（麗澤大学講師）</p> <p>岩下 哲典（明海大学/東洋大学教授）</p> <p>小林 裕子（明海大学教授）</p> <p>藤田 智子（明海大学講師）</p>	<p>杉原 素子（国際医療福祉大学保健医療学部長）</p> <p>西田 裕介（国際医療福祉大学保健医療学部科長）</p> <p>樽井 正義（国際医療福祉大学教授）</p> <p>河野 眞（国際医療福祉大学教授）</p> <p>倉智 雅子（国際医療福祉大学教授）</p> <p>内田 信也（国際医療福祉大学教授）</p> <p>森山 ますみ（国際医療福祉大学准教授）</p> <p>河野 健一（国際医療福祉大学講師）</p> <p>町田 和（国際医療福祉大学講師）</p> <p>平野 大輔（国際医療福祉大学講師）</p> <p>吉野 留美（国際医療福祉大学講師）</p> <p>小宅 一彰（国際医療福祉大学助教）</p> <p>澤 龍一（国際医療福祉大学助教）</p> <p>山口 将希（国際医療福祉大学助教）</p> <p>二田水 彩（国際医療福祉大学助教）</p> <p>石井 清志（国際医療福祉大学助教）</p> <p>松尾 英憲（国際医療福祉大学助教）</p> <p>和気 秀文（順天堂大学教授）</p> <p>山中 航（順天堂大学助教）</p> <p>井上 茂（敬愛大学教授）</p> <p>市山 マリア しげみ（城西国際大学教授）</p> <p>佐久間 敦子（千葉敬愛短期大学ゼネラルマネージャー）</p> <p>山本 長紀（木更津工業高等専門学校専任講師）</p>
<p>富谷 利光（秀明大学教授・SGH 運営指導協議員）</p> <p>江頭 靖二（ニュータニックスジャパン合同会社・SGH 運営指導協議員）</p> <p>藤田 晃之（筑波大学教授・SGH 運営指導協議員）</p> <p>高岡 裕之（JTB コーポレートセールス企画開発局・SGH 運営指導協議員）</p> <p>植木 和司郎（Global Link 実行委員会日本事務局長・SGH 運営指導協議員）</p> <p>小松 俊明（東京海洋大学教授・SGH 総括アドバイザー）</p> <p>下島 泰子（東京学芸大学・SGH アドバイザー）</p> <p>石塚 誠（成田高等学校）</p> <p>筋 美佳（千葉県教育庁企画管理部県立学校推進課）</p> <p>成川 賢一（千葉県教育庁教育振興部学習指導課）</p> <p>小西 一央（千葉県教育庁教育振興部学習指導課）</p>	

千葉大学（学部生・院生）、麗澤大学（学部生）、東京海洋大学（学部生）、東京学芸大学連合大学院（院生）、東京国際大学（学部生）

## 2 国内フィールドワーク（訪問先一覧）

訪問先	協力団体
イスコン・ニュー・ガヤ・ジャパン [ヒンドゥー教寺院] (江戸川区船堀)	クリシュナ意識国際協会
シャプラニール [国際協力 NGO] (新宿区西早稲田)	シャプラニール = 市民による海外協力の会
東京ジャーミー [モスク]・トルコ文化センター (渋谷区代々木上原)	(宗)東京・トルコ・ディヤナト・ジャーミー
麗澤大学 (柏市)	麗澤大学国際交流センター
神田外語大学 (千葉市美浜区)・アジア食堂「食神」	
多文化共生センター東京 (荒川区西置久)	NPO 法人多文化共生センター東京
しんじゅく多文化共生プラザ (新宿区歌舞伎町)	新宿区地域文化部多文化共生推進課
韓国文化院 (新宿区四ツ谷)	駐日韓国文化院
高麗博物館 (新宿区大久保)	
JICA 地球ひろば (新宿区市ヶ谷)	JICA
三番瀬海浜公園 (船橋市)	三番瀬環境市民センター・(公財)船橋市公園協会
東京都廃棄物埋立処分場 (江東区青海)	東京都環境公社中防管理事務所
日本科学未来館 (江東区台場)	
千葉県立中央博物館 (千葉市中央区)	
浅草・仲見世 (台東区)	浅草文化観光センター (東京 SGG クラブ) NPO 法人ホスピタリティ成田
足尾銅山 (栃木県日光市)	足尾銅山環境学習センター 足尾銅山観光 足尾に緑を育てる会
農園リゾート・THE FARM (香取市)	株式会社・和郷
鴨川・大山千枚田 (鴨川市)	合同会社鴨川観光プラットフォーム 大山千枚田保存会・鴨川農家民泊組合 鴨川市棚田倶楽部・鴨川市農林業体験交流協会
多文化フリースクールちば (千葉市中央区)	NPO 法人多文化フリースクールちば
幕張インターナショナルスクール (千葉市若葉区)	
ブラジル系コミュニティー (群馬県邑楽郡大泉町)	日伯学園・大泉町観光協会
在日クルド人コミュニティー (埼玉県川口市)	多文化共生協働センター川口・日本クルド文化協会 川口クルド文化教室創 curu 合同会社

### 3 海外フィールドワーク・訪問先一覧

\* 連携先：NPO 法人パルシック，マレーシア政府観光局

クアラルンプール市内（観光施設・商業施設・街頭）
学校（都市部私立）Seri Cahaya School
学校（地方部公立）SMK Sungai Pelek
スンガイ・アチエ村 Sungai Acheh（農村民泊）
ペナン沿岸漁民福利協会 PIFWA
クアラ・グラ鳥類保護区 Kuala Gula Bird Sanctuary
ジョージタウン市内（観光施設・街頭，ペナン・ヘリテージ・トラスト）
スンガイ・バトゥ村 Sungai Batu（リゾート開発の進む漁村）
学校（ペナン公立）
ペナン消費者協会 CAP
開発推進者（州政府関係者）Penang Development Corporation

### 4 講演会・ワークショップ・グループ活動の講師一覧

2015 年度（平成 27 年度）
<p>成瀬 猛（麗澤大学教授）「グローバル化の光と影」</p> <p>岩下 哲典（明海大学教授）「地域の歴史・文化を観光の目玉にしよう」</p> <p>阿古 智子（東京大学准教授）「現代中国をエスノグラフィーで研究する」</p> <p>金丸 治子（イオン）「持続可能な社会の実現をめざして」</p> <p>金光 公太（成田市）「空港を活かしたまちづくり」，相澤 修一（千葉県）「千葉県の展開する観光戦略」</p> <p>内山 雄大（公益財団法人プラン・ジャパン）「世界での教育に関する問題，教育支援の取り組み」</p> <p>大島 希巳江（神奈川大学教授）「グローバル社会のリーダーとして」</p> <p>【GS 教養講座】『成田市まちづくりワークショップ』*参加者：24 名 [1 年～3 年]</p> <p>金光 公太（成田市企画政策課），長野 庸平（成田市企画政策課），観音寺 拓也（ちばぎん総合研究所），五木田 広輝（ちばぎん総合研究所）</p> <p>【GS 教養講座】『国内フィールドワーク第 2 回』（浅草・鴨川・香取）*参加者：47 名 [1 年]</p> <p>【GS 教養講座】『国内フィールドワーク第 3 回』（香取）*参加者：10 名 [1 年]</p>
2016 年度（平成 28 年度）
<p>小松 俊明（東京海洋大学教授）「グローバル社会において必要な力」（1・2 年対象）</p> <p>長野 庸平（成田市企画政策課）ほか 4 名「成田市まちづくりワークショップ」（1 年対象）</p> <p>岩本 涉（千葉大学特任研究員）「研究テーマとグローバルな視点をどう結びつけるか」（1 年対象）</p> <p>阿古 智子（東京大学准教授）「現代中国をエスノグラフィーで研究する」（1 年対象）</p> <p>【GS 教養講座】『成田市出前講座』</p> <p>講座 1：成田市危機管理課「市が進める防災対策と地域・家庭での防災対策」*参加者：10 名 [1 年～2 年]</p>

<p>講座 2：成田市観光プロモーション課「国際観光都市成田の観光行政」 *参加者：22名 [2年]</p> <p>【GS 教養講座】「本物のガーナチョコレートを作るプロジェクト」 *参加者：23名 [1年～3年]</p> <p>上智大学総合グローバル学部学生 2名</p>
<p>2017年度（平成29年度）</p> <p>小松 俊明（東京海洋大学教授）「トビタテ！SGH 成国からグローバルな世界へ」（1年対象）</p> <p>小林 聡子（千葉大学助教）「課題研究のアプローチと観点」（2年対象）</p> <p>安部 健太郎（成田市スポーツ振興課）ほか4名「成田国際高校みらい カフェ」（1年対象）</p> <p>西森 光子（NPO 法人パルシック）「フェアトレードについて」（1年対象）</p> <p>白谷 秀一（NPO 法人多文化フリースクールちば代表）「研究活動の進め方」（1年対象）</p> <p>【GS 教養講座】『成田市出前講座』 *参加者：4名（観光をテーマとした班 [2年4-G班]）</p> <p>赤羽敏夫（成田市危機管理課）ほか1名「市が進める防災対策と地域・家庭での防災対策」</p> <p>【GS 教養講座】『ボランティア育成講座』 *参加者：本校生徒 26名（佐倉高校 14名，松尾高校 5名）</p> <p>都築 久仁子（IB ジャパン）「外国人おもてなし語学ボランティア講座」</p> <p>【GS 教養講座（YUME 講座）】（1年対象）</p> <p>講座 1：國學院大學国際協力サークル～優志～「国際協力が何だろうか？ 私たちにできること」</p> <p>講座 2：上田 真弓（元ソニー・パナソニック社員・塾講師）「真の国際人とは」</p> <p>講座 3：青野 茂昭（自衛隊中央病院第3内科部長・医学博士・一等陸佐）</p> <p>「国際緊急援助隊 フィリピン台風被害の事例について」</p> <p>講座 4：関 陽水（都市計画・交通計画コンサルタント会社海外事業部交通管理計画グループマネージャー）</p> <p>「途上国の都市環境問題の解決を仕事にする～都市計画・交通計画の仕事」</p> <p>講座 5：西 一（NPO 法人エコマラソン・インターナショナル理事長）</p> <p>「世界に愛され、尊敬されるグローバルリーダーの資質」</p> <p>講座 6：宮内 沙織（銚子大洋自動車脳若トレーナー・NPO 法人調子がよくなるクラブ事務局長）</p> <p>「地域が輝くまちづくり・人づくり」</p> <p>講座 7：工藤 綾子（JAL スカイ成田事務所空港オペレーション第3部トラフィックグループ エージェント）</p> <p>「共感力～語学を通して見つけた世界への入り口～」</p> <p>講座 8：大原 知子（アディダスジャパン・同時通訳 [英語]）「言葉と文化の狭間で～通訳という仕事～」</p> <p>講座 9：Yuki Saito（映画監督・本校卒業生）「Action and Reaction」</p>
<p>2018年度（平成30年度）</p> <p>小松 俊明（東京海洋大学教授）「トビタテ！SGH 成国からグローバルな世界へ」（1年対象）</p> <p>小林 聡子（千葉大学助教）「課題研究のアプローチと観点：批判性・論理性・創造性」（2年対象）</p> <p>【GS 教養講座】『成田市出前講座』他（2年対象）</p> <p>講座 1：成田市広報課「広報誌の作り方」 *参加者：12名</p> <p>講座 2：成田市観光プロモーション課「国際観光都市成田の観光行政」 *参加者：21名</p> <p>講座 3：成田市クリーン推進課「進めようリサイクル運動～ゴミは貴重な資源です～」 *参加者：7名</p> <p>講座 4：木川 直樹（成田国際空港株式会社）「成田空港の歴史～現在・過去・未来～」 *参加者：12名</p> <p>講座 5：千葉県動物愛護センター「犬殺処分0への道」 *参加者：8名</p>

望月 優大 (ライター)「日本の複雑さを旅する」(1年対象)

【GS 教養講座】島田 久仁彦 (株式会社 KS International Strategies・国際ネゴシエーター)

「グローバル社会を生きる君へ」 \*参加者: 30名 [1年~3年], 保護者 12名, 本校職員 8名

【GS 教養講座】國學院大學国際協力サークル~優志~「大学生によるカンボジアの今」

\*参加者: 13名 [1年~3年], 本校職員 4名

【GS 教養講座】木川 直樹 (成田国際空港株式会社)「成田空港の『過去・現在・未来』と『私の夢・志』」

\*参加者: 15名 [1年~3年], 保護者 1名, 本校職員 3名

2019年度 (令和元年度)

温 又柔 (作家)「台湾の多様性・複雑性」(2年対象)

【GS 教養講座 (YUME 講座)】(1年対象)

講座 1: 稲葉 健一 (元 JICA 職員・本校卒業生)「グローバル化と国際協力」

講座 2: 國學院大學国際協力サークル~優志~「大学生によるカンボジアの今」

講座 3: 木川 直樹 (成田国際空港株式会社)「成田空港の歴史~現在・過去・未来~」

講座 4: 大原 知子 (アディダスジャパン・同時通訳 [英語])「言葉と文化の狭間で~通訳という仕事~」

## 5 地域交流一覧

### 2019年度[令和元年度]・地域との主な交流事業(千葉県立成田国際高等学校)

1. 通訳ボランティア	成田太鼓祭 4/13(土), 14(日)
	和のコラボ 7/13(土)
	成田弦祭り 10/19(土)→雨天のため中止
	成田伝統芸能まつりボランティア 9/15(日), 16(月)
2. 和のコラボ	成田空港第1ターミナル到着階 7/13(土) →書道部・茶道部による日本文化を披露するパフォーマンス
	成田山書道美術館 11/4(月) →書道部・茶道部・箏曲部による日本文化を披露するパフォーマンス
3. 山車引き	成田祇園祭 7/6(土), 7(日) →剣道部・男女子ソフトボール部・陸上部・ダンス部・男女テニス部・男女バスケットボール部・女子バレー部・少林寺拳法部・バドミントン部・男子サッカー部・箏曲部
4. 地域清掃	美化委員が, TEPCOの方々と一緒に清掃活動(年3回)
5. スチューデントアシスタント	成田市内小学校で英語活動のアシスタント 12/20(金)
6. 成田市行事におけるボランティア活動	国際市民フェスティバル 10/6(日)
	歳末助け合い運動 JR成田駅前での募金活動 12/14(土)
	ニューイヤーパーティー 1/26(日)
7. ダンス部	成田山太鼓祭パレード先導 4/14(月)
	平成小学校の平成塾参加 7/22(月)
	ファンキーフレッシュファクトリー2019ダンスコンテスト 8月
	成田市久住地区・加良部地区敬老会にて公演 9月
	成田山弦まつりパレード先導 10/20(日)
	女子レスリングワールドカップ開会式オープニングアクト 11/16(土)
	千葉県韓国語スピーチ大会におけるパフォーマンス 12/7(土)
	四街道ダンスコンテスト(2月)
神崎ヤングフェスティバル(3月)	
8. 吹奏楽部	ボンベルタでの公演 5/3(金)
	成田空港クリスマス・フェスティバルでの公演 12/14(土)
	成田スカイタウンホールにてチャリティーコンサート 2/24(月) 開催中止
9. 箏曲部	成田市中台地区敬老会にて公演 10/5(土)
	公津の杜「もりんぴあ ザ・お正月」にて公演 1/12(日)
10. 学習ボランティア参加	栄町学習道場(わくドラ) 通年:土曜日及び夏休み, 冬休み
	向台小学校 7月(計4日)
	平成小学校平成塾 7/22(月)

6 SGH 研究推進体制

2019 年度 [ 令和年度 ]・SGH 研究推進体制 ( 千葉県立成田国際高等学校 )

委員会・作業班	推進委員		関連部署
コア委員会	校長・教頭(2名)・事務長 森本・福西・高橋美・川澄・内田・齋藤・津本・浅田・木村・石井・深堀・花香		1 学年・2 学年・3 学年・各作業班チーフ・管理職
< 研究開発 > GS 課題研究			
課題研究委員会	内田・川澄・朝永・福西・森本		1 学年 ( 課題研究基礎 )
	福西・高橋美・森本		2 学年 ( 課題研究発展・活用 )
	木村・福西・根本		3 学年 ( 課題研究活用 )
国内フィールドワーク	内田他 1 学年職員 7 名・石井・森本・教頭		1 学年
海外フィールドワーク	齋藤・下村・福西・森本・高橋美・下島		2 学年
< 研究開発 > GS プログラム			
アクティブラーニング	浅田・教頭・木村・飯塚・高嶋		教務部・各教科
日本文化発信	(ア) プロジェクト : 1 年・英語 ( 必修科目 )	内田・田村・北條	1 学年英語担当者 ( 普通科・国際科 )
	(イ) プロジェクト : 「GS 日本文化」( 3 年選択科目 )	坂元・津本	3 学年「GS 日本文化」担当者 ( 普通科・国際科 )
	(ウ) プロジェクト : 和のコラボ	津本・朴・塩澤・宮崎・永長・宇根・花香・川澄・根本・木村・福西・高橋美	書道部・箏曲部・茶道部顧問 「課題研究活用」担当者
ボランティア ・インターンシップ	(ア) 山車引き	伊藤・各部活動顧問	
	(イ) 通訳ボランティア	齋藤・霜鳥	国際教育部
	(ウ) 学習ボランティア	教頭	教頭が窓口
	(エ) スチューデント・アシスタント	根本・福井	進路指導部
	(オ) 成田市国際交流協会	齋藤・塩澤・高橋・宮崎	国際教育部
	(カ) ボランティア同好会	木村	ボランティア同好会顧問
	(キ) インターンシップ	根本・坂元	進路指導部
海外留学支援	(ア) 短期留学受入・短期派遣	齋藤・下村・霜鳥	国際教育部
	(イ) 留学支援事業一般	齋藤・霜鳥	国際教育部
	(ウ) トビタテ！留学 JAPAN	福西・中村・高橋	国際教育部
GS 教養講座	教育課程外の講座 ( 土曜講座 )	森本・教頭	
SGH 情報	松沢・小島・教頭		情報部 ( HP 担当 )
評価・検証	森本・教頭・松沢・福西		コア委員会・情報部

## 7 運営指導協議会

### 1 運営指導協議員

富谷 利光 氏（会長）	秀明大学 学校教師学部 教授 秀明大学学校教師学部附属秀明八千代中学・高等学校長
江頭 靖二 氏（副会長）	ニュータニックスジャパン合同会社チャンネルセールス部長
藤田 晃之 氏	筑波大学 教育学域 教授
植木 和司郎 氏	JTB 教育事業ソリューションセンター Global Link 実行委員会 日本事務局 事務局長
小松 俊明 氏(オブザーバー)	本校 SGH 総括アドバイザー 東京海洋大学 グローバル人材育成推進室 教授

### 2 運営指導協議会 実施日・協議事項

	実施日	協議事項
第1回	令和元年7月19日(金) 14:30～16:30	平成30年度の活動報告について 令和元年度事業計画案について 最終報告および指定終了後の構想について 協議（質疑応答・指導助言）
第2回	令和2年3月10日(火) 14:30～16:30 新型コロナウイルス感染症 拡大のため開催せず	令和元年度の活動報告について (ア) 研究開発（課題研究・フィールドワーク） (イ) 研究開発（アクティブラーニング等） (ウ) SGH 研究発表大会 SGH 事業に関わる最終報告（案）について 協議（質疑応答・指導助言）

運営指導協議員は、令和元年12月19日(木)「第4回SGH研究発表大会」にも出席。



8 研究テーマ一覧・1年課題研究基礎(2019年度)

グループ	分野	研究テーマ
A 1	環境	地球温暖化の対策
A 2	環境	日本の海洋問題について
A 3	観光	飢餓について
A 4	観光	観光の裏
A 5	観光	成田に訪れる外国人観光客の不満と改善策
A 6	教育	異文化との壁
A 7	共生	このままでいいの？ 宗教との関わり
A 8	共生	ムスリムの生活
B 1	環境	ホッキョクグマの危機
B 2	環境	水質汚染とその対策
B 3	観光	ブラジルと日本の違い
B 4	観光	外国人観光客への対応
B 5	教育	日本での外国人教育の現状
B 6	教育	若者の農業離れを解決するには
B 7	共生	日本と世界の LGBT の見方の違い
B 8	共生	タトゥーから考える多文化共生
C 1	環境	外来種
C 2	観光	東京ディズニーリゾートを世界一にしよう
C 3	観光	Welcome to Safty Japan
C 4	教育	フィリピンの教育
C 5	教育	災害ごみと私たちにできること
C 6	教育	先生と私たち
C 7	共生	難民の現状とこれから
C 8	共生	LGBT と私たち
D 1	環境	シロクマさんを救おう！
D 2	観光	水質汚染が生物に与える影響～日本の食文化の危機！！？～
D 3	観光	外国人差別をなくすために
D 4	観光	世界各国のマナー～東京オリンピックに向けて～
D 5	教育	World education
D 6	共生	天使の羽-Fuwary-～ランドセルの海外支援について～
D 7	共生	Let's understand religion
D 8	共生	犬の気持ち・猫の気持ち

グループ	分野	研究テーマ
E 1	環境	酸性雨から考える個人の力
E 2	環境	足尾の未来と現状
E 3	観光	足尾インバウンド計画
E 4	観光	おもてなし
E 5	教育	いじめと虐待
E 6	教育	日本に取り入れた方がよい海外の授業
E 7	共生	TOKYO から未来へ～オリンピックのこれから～
E 8	共生	難民と人権
F 1	環境	#instagomi
F 2	観光	楽しくなければ成田国際空港じゃない
F 3	観光	なぜ日本人は英語ができないのか？
F 4	観光	宗教の違いを超えて日本食を楽しんでもらうには
F 5	教育	貧困地域の教育について～日本はどれだけ幸せか～
F 6	教育	日本語教育の現状と解決策
F 7	共生	LGBTQ の抱える問題と解決策 in Japan
F 8	共生	各国の電車マナー
G 1	環境	世界のトイレ
G 2	環境	食品ロス～ズドン！！～
G 3	観光	私たちの観光客増加計画！
G 4	観光	あなたの使う英語はネイティブ？
G 5	観光	若者から見た日韓問題～平和な未来のために～
G 6	教育	東アジアの受験
G 7	教育	日本教育への提案
G 8	共生	在留外国人とどう接していくべきか
H 1	環境	森林の重要性
H 2	観光	自然と観光の融合
H 3	観光	宿泊施設はホテルだけじゃない！～民泊で空家問題解決～
H 4	観光	観光地～地方に外国人観光客を呼ぶために～
H 5	観光	東京オリンピックによる影響
H 6	教育	未来の教育を考える
H 7	共生	The Clothes difference around the world
H 8	共生	共生の実現に向けて～カンボジアと教育～



# 日韓の高校生「通じ合った」笑顔

成田市の県立成田国際高校に韓国の高校生18人が訪れ、授業に参加したり、韓国語を学ぶ生徒たちと交流したりした。厳しい両国関係を反映し来日する韓国人旅行者は大幅に減っているが、生徒たちはすぐに打ち解け、Kポップや恋愛の話題に花を咲かせた。

ソウル南方の果川市にある果川外国語高校の女子15人と男子3人。両校は2002年に姉妹校となり、一時期を除いて相互訪問を続けている。韓国の生徒は土曜日の18日から日本側の生

スマートフォンで一緒に写真を撮る日韓の高校生たち

## 成田国際高「認め合い友情育つ」

徒宅でホームステイをし、週が明けた20日、ホストの生徒と一緒に登校した。

韓国語クラスの生徒40人との交流では、韓国の若者がSNSで使う言葉を日本の若者言葉に置き換えて紹介するなどして盛り上がった。スマートフォンのカメラで一緒に自撮り写真を撮ったり、SNSのアカウントを教え合ったりする姿もあちこちで見られた。

日本の大学に入りたいという金河珍さん(17)は「みんな優しくて笑顔で話してくださって、とてもいい思い出を作りました」。権宣真さん(16)は「本当に友だちのようで、うれしかっ

たです」。

春から韓国の大学に進学する山崎莉方さん(18)は「日韓関係が政治面ではぎくしゃくする中、日本に来てもらい、両校の生徒が通じ合う瞬間を感じられた。お互いに意思疎通ができる関係を保っていただけら」。長南愛海さん(17)は「日本と韓国の高校生が交流できる場をたくさん設け、SNSでも交流を深めていただけらなと思います」。

そんな生徒たちに成田国際高の深山和利校長はこう言葉を贈った。「お互いの共通点、相違点に気づき、それらを理解し認め合うことで、友情が育ちます」

(福田祥史)